

シンポジウム録

非言語行動における聞き手の役割

話し手志向・聞き手志向を超えて^{1) 2)}

企画：荒川 歩³⁾・高橋 秀明⁴⁾司会：木村 昌紀⁵⁾話題提供者：細馬 宏通⁶⁾・磯 友輝子⁷⁾・坊農 真弓⁸⁾指定討論者：古山 宣洋⁹⁾・西尾 新¹⁰⁾・安藤 花恵¹¹⁾

Roles of the listener in nonverbal communication: Over the dichotomy of speaker - oriented gesture and listener - oriented gesture.

ARAKAWA Ayumu, TAKAHASHI Hideaki, KIMURA Masanori, HOSOMA Hiromichi,
ISO Yukiko, BONO Mayumi, FURUYAMA Nobuhiro, NISHIO Arata, ANDO Hanae

木村：本日はワークショップ「非言語行動における聞き手の役割：話し手志向・聞き手志向を超えて」にご参加いただき大変有難うございます。司会は私、大阪大学大学院の木村です。まずは、企画の荒川先生の方から、企画趣旨の説

明をお願いします。

荒川：立命館大学の荒川と申します。今回の企画の背景についてご説明します。

身振りの研究は、McNeill(1987)が身振りは発話と違う部分を表わすと指摘したことによって大きく変わったとされています。それまで身振り、あるいは非言語行動というものは何か記号のようなもので、誰かに何かを伝えるための”ジェスチャーゲーム”みたいなものとして説明されていた。いわゆる身振りの聞き手指向性と呼ばれるものです。以前はそこまで話が終わってしまっていたんですけども、McNeill以降、話し手自身のために身振りをしているんじゃないか、という理論がいろいろ出てきました。このMcNeillによる身振りの話し手指向の発見は素晴らしいと僕は思うんですね。それまでにない新しい視点をみつけたと言う意味で非

-
- 1) 本稿は、第68回日本心理学会大会(2004年9月12日、関西大学)において、立命館大学人間科学研究科共催で行われたワークショップ「非言語行動における聞き手の役割：話し手志向・聞き手志向を超えて」を元に執筆したものである。
 - 2) 学会におけるワークショップを収録したものであるため、編集委員会の判断により、「です」「ます」調のまま掲載した。
 - 3) 立命館大学人間科学研究科
 - 4) メディア教育開発センター・総合研究大学院大学
 - 5) 大阪大学大学院人間科学研究科
 - 6) 滋賀県立大学人間文化学部
 - 7) 大阪大学大学院人間科学研究科
 - 8) ATR-MIS・神戸大学
 - 9) 国立情報学研究所
 - 10) 大阪学院短期大学
 - 11) 京都大学大学院教育学研究科・日本学術振興会特別研究員

常に意味があると思うんです

しかし、いろんな現象をみていますと、どうしても単に話し手志向、聞き手志向という二項対立だけでは見えない部分というのが出てきたんです。そこで、今回ご発表いただく先生には、いろんな現象の中から聞き手指向/話し手指向だけでは説明しきれない、聞き手というものが非言語行動に与える影響についてお話しただければと思います。

木村：それでは話題提供に移りたいと思います。まずは、話題提供を大阪大学大学院の磯先生からお願いします。

1. 3者間会話場面における非言語行動と印象形成の関係

磯 友輝子 (大阪大学大学院人間科学研究科)

1-1. はじめに

大阪大学大学院の磯と申します。よろしくお願ひします。発表は、まず3者間会話場面での聞き手の存在について述べ、3者間特有の行動指標の提案をします。次いで実験室実験から得られた結果を報告し、最後に総合考察をいたします。ここでの3者間会話は聞き手、話し手役割のない自然な対話ですので、聞き手は「会話相手」とします。

1-2. 3者間会話場面における会話相手の存在と特有の非言語行動

まず、3者間会話における会話相手の存在と特有の行動についてです。多くの研究で扱われる2者間会話とは、会話相手が2人であることから会話相手への行動や注意の配分の相違が予想されます。また、3者間会話では参加者間に存在する「間」の数が増えることから、相互作用空間が複雑で曖昧であると考えられます。先行研究でも2者間と3者間では身振り表出に相違が認められており (Özyürek, 2000), 2者間会話実験の知見の3者間会話への適用には注意

を要するでしょう。したがって、3者間会話の基礎データを収集し、2者間とは異なる会話相手の影響を把握する必要があります。

本発表では、会話相手の存在と関連する指標として行動配分と視線のモニタリング行動を取り上げます。これらの行動には相互作用の目的が関連すると思われます。身振りに聞き手志向、話し手志向があるように、良い印象を与えたいという他者志向的目標と、会話に満足したいという自己志向的目標があります。そこで、この2つの目標を達成するために、2人の会話相手に対して均等に行動を配分するのか、あるいは相手の反応に対応するように均等でない配分をするのかを検討します。また、会話中には3種類の視線行動が見られます。第1に聞き手として傾聴を示す視線 (聞き手視線)。第2に話し手として会話相手が自分の話に興味を示しているかを確認する視線 (話し手モニタリング)。最後に、聞き手としてもう1人の聞き手の様子をうかがう視線 (聞き手モニタリング) です。これらはKendon(1967)が指摘する機能のうちモニタリング、調整を3者に適用させたものと言えます。これら3つの視線 (以下、視線モニタリング行動) と各目標との関連性を検討します。

1-3. 方法

次に実験の方法です。実験参加者は初対面の男女大学生48名、同性3人の16組です。討論か親密条件かのどちらかに参加しました。討論条件とは何らかの社会問題の統一見解を示す議論、親密条件とは互いに親しくなるための会話です。非言語行動表出の性差が先行研究で指摘されるため分析では性別を統制あるいは共変量とします。実験は、質問紙への回答、その後18分間の会話、会話後に質問紙への回答、最後にディブリーフィングの流れです。各話者が正面を向いた状態で一画面に収まるように合

成して録画しました。会話前の質問紙は2種類の社会的スキル尺度、会話後は会話相手2人の印象（7項目7件法；大坊，1978）と会話行動評価、会話満足度評定（いずれも8件法；木村ら，2002）等です。会話行動評価は、会話をうまく調整していたか、好意的に話していたか、興味を持って話していたかの評価です。分析対象の行動指標は、視線、うなずき、笑顔、発話量です。これらはイベントレコーダー（荒川・鈴木，2004）により0.5秒単位で1 - 0でコーディングしました（各指標は対数変換して分析）。

1-4．結果：行動配分について

では、行動配分に関する結果です。配分方向が明確な必要があるため、視線とうなずきを取り上げました。視線方向は判別可能ですが、うなずき方向はコーディング時では判別が難しいため、発話のコーディング結果を組み合わせで誰の発話中のうなずきかを特定しました。同様に視線と発話の組み合わせで誰の発話中に向けた視線かを特定して視線モニタリング行動指標で用います。

まず、うなずき配分と他者志向的目標についてです。うなずき配分は、例えばCさんのうなずき配分は、Aさんが発話中にCさんがうなずく、Bさんの発話中にCさんがうなずくという2つのうなずき量を算出し、その差分で示されます。うなずき配分と各印象評定との偏相関分

析（ $n=48$ ）を行ったところ、討論条件では配分に偏り大きいほど「話が上手く」、「しっかりした」印象が抱かれていました（順に $r=.45, .46, p<.05$ ）。つまり、弁別的に相手にうなずくことで好意的評価を得ることが示されました。一方、親密条件では配分が均等なほうが「健康的」であると評定されました（ $r=-.54, p<.05$ ）。では、うなずき配分と会話満足度にはどのような関係があるのでしょうか。自己知覚理論（Bem, 1972）の視点から自己の行動の影響で自己志向的目標も達成されるかもしれません。そこで、偏相関分析を行ったところ、討論条件では有意な関連性はみられませんでした。親密条件では配分に偏りがあるほど会話満足度が高い傾向がありました（ $r=.41, p<.10$ ）。弁別的うなずきは自分も会話がしやすく満足感を導くようです。

次に、視線配分は2人の会話相手に向けた視線量の差分で示されます。視線量が多く、かつ視線配分が均等であれば好意的印象を獲得するという仮説を、視線量の多さ（H/L群）と視線配分（H/L群）を独立変数、会話相手2者からの印象評定の合計値を従属変数とした共分散分析で検討しました。「感じが良い」については討論条件で交互作用が有意であり（ $F(1,19)=6.93, p<.05, n=24$ ）、少ない視線量の際に均等配分であれば高く評定されていました（図1-1）。討論条件の「しっかりした」、「話しやすい」、親密条件の「話しやすい」でも交互作用が有意で視線量が少ない場合に配分の効果が見られ、逆に配分に偏りがあったほうがポジティブな印象を得ていました。さらに、討論、親密条件共に「話の上手さ」には視線量が多いときに均等配分の効果が得られました。以上の結果から、スキルの側面が加味される「話の上手さ」では仮説が概ね支持され、他の印象に関しては少ない視線量の際に視線配分が求められていました。しかし、均等が望ましいかどうか

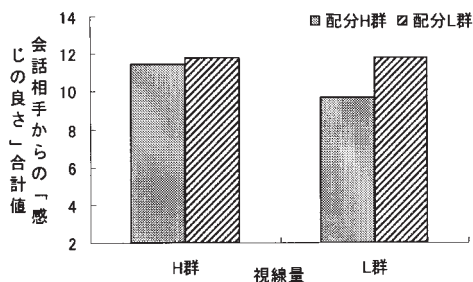


図1-1 討論条件における視線量と視線配分による「感じが良い」印象への影響

は一様には決まらないようです。また、会話満足度についても同様に分析しましたが有意な効果は得られず、視線配分は印象を獲得する際に影響を持つ指標と言えるのかもしれませんが。

1-5 . 結果：視線モニタリング行動について

他の発表で報告しましたが、行動表出量を独立変数、印象、会話満足度を従属変数とした重回帰分析では、うなずきや発話量、笑顔には影響が多数確認されました (Iso, Kimura, Sakuragi, & Daibo, 2004)。一方、視線では僅か2つの関連性しか有意ではなく、しかも視線量は「しっかりしてない」、「健康的でない」とネガティブな印象と結びついていました。しかし、視線配分の影響力が視線量に依存していたように、視線はその向け方が重要なのではないのでしょうか。そこで、視線モニタリング行動に注目

します。

視線モニタリング行動は、討論よりも親密条件で聞き手視線、話し手モニタリングが多くみられました (表1-1)。これらが会話満足感とどのように関連しているのか偏相関分析したところ、討論条件では話し手モニタリングと ($r=.32, p<05, n=48$), 親密条件では聞き手モニタリング ($r=.38, p<01, n=48$) と有意な関係が得られました。議論をする討論では話し手として会話調整に視線を用い、話題が特定されていない親密条件では、話していない相手にも視線を向けた人ほど満足を得ることが示唆されます。一方、視線モニタリング行動と印象、会話行動評価との関係も検討したところ (表1-2), 視線モニタリング行動が多いほど好意的評価がされる場合もありますが、討論で過度に視線モニタリング行動をしてしまうと「しっかりして

表1 - 1 視線モニタリング行動の平均生起時間

	会話相手1人あたりに対する平均時間			会話者1人の合計平均時間		
	聞き手視線	話し手 モニタリング	聞き手 モニタリング	聞き手視線	話し手 モニタリング	聞き手 モニタリング
討論条件	235.99	158.01	148.25	471.98	316.02	296.50
SD	122.35	96.99	92.70	183.11	144.80	142.96
親密条件	316.63	224.34	123.22	633.25	448.69	246.44
SD	211.22	115.54	69.83	241.33	168.74	118.78

対数変換前の数値 単位は秒

表1 - 2 視線モニタリング行動と印象および会行動評価の偏相関係数

	視線を向けた会話相手からの印象			視線を向けた会話相手からの会話行動評価		
	感じの良い	健康的な	しっかりした	調節	好意的	興味
討論条件						
聞き手視線			-.36 *			
話し手モニタリング		.32 *	-.25 †			
聞き手モニタリング		.47 ***	-.37 *			-.27 †
親密条件						
聞き手視線	.26 †	-.35 *	-.29 *	.29 †	.31 *	.39 **
話し手モニタリング				.29 *		.30 *
聞き手モニタリング	-.33 *		.28 †		-.26 †	

† $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$ 性別を共変量として統制 各条件 $n=48$

有意な相関関係が見られたもののみ表示

いない」と思われる危険性もみられます。また、
 相關関係が得られなかった印象および会話行動
 評価と視線モニタリング行動の散布図におい
 て、聞き手視線ではいくつか逆U字関係が示さ
 れました。特に「調節」は多すぎず、少なすぎ
 ずの中程度の表出が好意的に認知されていま
 した（H群 $M=5.30 < M$ 群 $M=5.78$, $r=.46$, $p<.05$,
 $n=23 > L$ 群 $M=4.60$ ）。

1-6．総合考察

最後に総合考察です。残念ながら、この非言
 語行動でこの印象が獲得できるという法則はな
 いというのはお分かりのことと思います。なぜ
 なら、状況、目標、成員構成によって法則は変
 動してしまうからです。特に3者間会話では2
 対1構造になる可能性を孕んでいます。では、
 会話の輪から孤立せずに会話に満足し、好意的
 印象を獲得するためには何に注意すれば良いの
 でしょう。ここで聞き手の役割が重要なのです。
 ここで取り上げた配分や視線モニタリングのよ
 うな行動への配慮が求められるのだと思いま
 す。例えば、相手をあまり見ず会話に入り込む
 のが難しい時、好意的な印象の獲得には視線配
 分の影響力がありました。また中庸な視線行動
 が会話調節をすると認知されていました。日本
 は高コンテクスト文化と言われます（Hall,
 1976）。したがって、聞き手に配慮した行動が
 求められ、そのような行動に関するコミュニケ
 ーションスキルが必要なのだと思います。

1-7．質疑

質問者：一つ聞かせてもらいたいのですが、さ
 きほどのうなずきが傾斜配分されるという話で
 すが、相手が話している時間とか、そういうも
 ので割り算していくんでしょうか。

磯：そうですね、本日は詳細は申し上げなかつ
 たのですが、発話量やうなずきの表出には個人

差がありますから、会話相手の発話中にうなず
 いていた量を算出する場合には、（自分のうな
 ずき量）／（相手の発話量）×（相手が発話中
 のうなずき量）で求めて個人差を統制していま
 す。

木村：有難うございました。会話者の人数、そ
 の関係性、話題によって、視線やうなずきのも
 つ心理的意味が異なるという磯先生のお話は、
 会話に関する多彩な要因ネットワークにおける
 ダイナミックなプロセスの中で非言語行動がう
 まれることを示唆していたように思います。

続きまして、坊農先生お願いします。

2．ジェスチャーにおける相互行為的側面の観 察 表現主体の視点概念の提案から

坊農真弓(ATR-MIS・神戸大学)

2-1 はじめに

今回の発表では、私が聞き手志向と話し手志
 向の問題に関して、一体どういう興味を持って
 いるかと、簡単な話題提供をさせていただき
 たいと思います。日常生活の中で、何のために人
 はジェスチャーをするのか。これはとても大き
 い問題で、今回の発表や私の考えの中だけでは
 何にも答えは出せそうにありません。しかし、
 そのことについて、この場を借りて少し皆さん
 と考えてみたいと思います。

2-2．観察対象

ジェスチャーとここで呼んでいるのは、手の
 動きによるものです。先ほどの磯先生のご発表
 では、聞き手に対する視線配布も観察しておら
 れました。視線配布もジェスチャーも身体動作
 からなるものですが、コミュニケーションや情
 報伝達上では、おそらく持つ意味が違うのだら
 うと思います。ジェスチャーは、記号的な意味
 を持つ可能性もありますが、視線配布は、そこ
 まで意図的になされる身体動作ではありません

ん。

2-3 . 先行研究の流れ

私はジェスチャー研究には二種類あると思っています。「心」に関わるジェスチャー研究、「身」に関わるジェスチャー研究です。「心」に関わるジェスチャーとは、自分が対象や対象世界を前にして、それを解釈するために手が動くとか、表現者の心内にあるイメージを整理するために手が動くとか、そういった表現者の心内にある不確かなイメージを概念として定着化させていくことと関わるものです。こういった研究は、近年McNeillを代表として、言語と思考の関係性を探っている人々によって確立されています。

「身」に関わるジェスチャーとは、人と人とが身体を向き合わせ、視覚的情報が利用できるコミュニケーション環境で、ジェスチャーを情報伝達の道具として利用するということと関わるものです。

ジェスチャー研究の流れは、Kendonの研究(例えばKendon, 1980)とMcNeillの研究(例えばMcNeill, 1992)というのがあります。Kendonの研究というのは、構造分析とか文脈分析、ディスコースのなかでどのようにスピーチとかジェスチャーが構造をもって使われるかということの問題にしています。更に、Kendonは対面コミュニケーションに焦点を当てて研究しているので、相互行為の問題としてジェスチャーを捉えています。社会学において相互行為を研究するGoffmanの議論をKendonが引用していることから分かるように、Kendonは、社会構造のなかで相互行為を考えています。Kendonは自分自身の研究方法を「構造的アプローチ」と名付けています。

一方、McNeillの研究は、上述しましたように、概念化とか、メタファーとか、事象の認知の問題としてジェスチャーを捉える風潮がとて

も強いのではないかと思います。McNeillは、ジェスチャーを単位に分節化し、ジェスチャーと発話の共起関係の観察をしています。こういった観察を通して、表現者の心内イメージの研究へと発展していったと思います。しかし、そもそもジェスチャーを単位に分節化するという考え方は、Kendonの1980年に発表された構造的アプローチによるジェスチャー研究の論文で定義されました。そういった相互行為に構造があるというKendonの最初の仮定を緩用した形で、McNeillはジェスチャーの研究を開始したのです。

McNeillは、Kendonの分析手法を取り入れながらも、認知科学的転回以後にジェスチャー研究を開始した人物です。近年では、McNeillの認知的観点を取り入れたジェスチャー研究を参照した新しい流れも見られます。それは、ジェスチャー表出時の心内処理や、fMRIといった脳機能を調べる装置を用いて、ジェスチャーや手話が音声による表現とどの程度関係したものを観察する流れです。

私は、談話や対話といった2者以上の人物によって情報が交わされる場面のことばやジェスチャーに特に興味があります。なので、McNeillの認知的なジェスチャー研究だけではなく、Kendonの構造的アプローチを、もう一回再考したいという気持ちがあるんですね。なので、私は、対話中のジェスチャーを観察し、表現者の認知的側面と相互行為的側面の関わりをどのように見ていけばいいのかということを中心に考察します。

2-4 . 相互行為における視点概念の提案

McNeillは、表現者がジェスチャーする際に所持する「登場人物の視点」「観察者の視点」という二種類の視点を提案しています。登場人物の視点とは、例えば、走るといったジェスチャーをするときに、自らが登場人物になったよ

会話例

- 01B : のび太は[ど]んなときに取られた? (710)
- 02A : [うん]
- 03A : | のび太は (287) | あっ (120) のび太が取られたとき? (228)
- 04B : うん
- 05A : のび太はえっと (696)
- 06A : 道で歩いてってあの | なんかなその前に || のび太が (220) |
- 07B : うん
- 08A : [そ]のドラマに | (529)
- 09A : かわいい子とかおるやん (206) | その人と一緒に共演したいみたいなことなっ [て、]
- 10B : [あー]=
- 11B : =[うんうん]
- 12A : [それで]共 | 演して | いい思いを味わったのを | ジャイアンと || スネオが || 見て (75) |
- 13B : うんうん[うん]
- 14A : [ほんで] (239) それはなんかドラえものの道 [具でやったやろ] =
- 15B : [うんうん] =
- 16A : = ってこ [となつて] (136) | 道端歩いてる時に (504) |
- 17B : = [はいはいはい]
- 18A : | 取られて (320) |
- 19B : あーなる [ほどね]
- 20A : [オッケー?]

(1) 話者Aの視線の種類

- (ア) 話者Bを見ている (点線-----)
- (イ) ジェスチャー空間を見ている (棒線_____)
- (ウ) あらぬ方向を見ている (波線~~~~~)
- (エ) 伏せ目がちに下を見ている (二重線_____)

(2) 話者Aのジェスチャー

- 下に置いていた両手を机の上に乗せる：ジェスチャー開始
- 握った両手を少し前に出す：少し前の話を言及していることを表す
- 前に出していた両手を元の位置に戻す：説明再開を表す
- 右手を少し机から浮かせて軽く下へ動かす：右手は「かわいい子」、下へ動かす動作は「いる」を表す
- 机の上で右手と左手の握りこぶしを合わせる：共演を表す
- 右手を少し机から浮かせて左方向を指差し：指差しの先は「ジャイアン」を表す
- 続けて右方向を指差し：指差しの先は「スネオ」を表す
- で共演を表した位置を指差し：「ジャイアンとスネオが『共演』を見る」を表す
- つまんだ形の右手で自分から遠ざかるように前方へ動かす：「道を歩く」を表す
- で自分の側から離れていった右手を勢いよく自分の方へ戻す：「取られて」を表す

うに走る格好をします。一方、観察者の視点とは、例えば、走るといったジェスチャーをするときに、自らがその場面の観察者になったように、手元に作ったジェスチャー空間に目を落としその空間の中で人が走るジェスチャーを手や指を使ってします。このように、表現者の内心の対象や対象世界に対する認知の仕方の違いは、ジェスチャー表現にも現れるとMcNeillは考えます。

私は、このMcNeillの考え方に対し、メタレベルの視点概念を提案します。対面コミュニケーション環境における情報伝達を考えるためには、McNeillのように、表現主体の対象認知について考えるだけでは足りないのではないかと思います。会話といった我々が日常的に交わす相互行為上で情報伝達を論じるためには、話し手が対象を認知し、それを表現することを考えるだけではなくて、もう一つ、聞き手に表現を伝達するという視点が必要なのではないでしょうか。私が提案する視点は「叙述的視点」「相互行為的視点」の二つです。叙述的視点は、表現主体が対象を認知し、ことばやジェスチャーによって表現する視点をいいます。相互行為的視点は、表現主体が自分の表現を聞き手に伝達する視点をいいます。

以下では、このメタレベルの視点概念、「叙述的視点」「相互行為的視点」はどういったものなのか、これらを提案することによってジェスチャー研究に対してどういう貢献ができるのかということ、データ分析を通して説明していきます。

2-5 . データ分析

データ分析の対象は、会話において話し手が聞き手に視線を向けるタイミングと、その時の発話とジェスチャーの関係です。こういった関係を分析するのは、一つ大きな前提に基づいています。それは、話し手が聞き手に視線を向け

る瞬間、これは話し手が聞き手を配慮する、タイミングであって、話し手の心内で情報を聞き手に伝達するという相互行為的側面が起動してくる瞬間なのではないかという前提です。

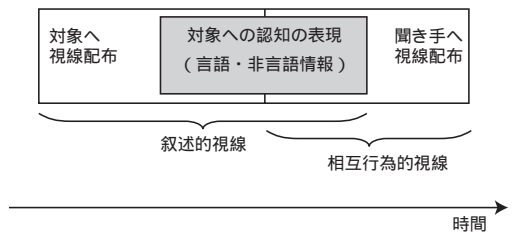
時間の関係上、ここでは会話の詳しい内容については割愛しますが、この分析から、以下のことが観察されました。

- * 話し手はジェスチャーする前にジェスチャー空間に視線を向ける
- * 話し手は発話終了付近で聞き手に視線を向ける
- * 聞き手は話し手の発話終了付近であいづちや応答発話をする

これは、単なる会話の一例です。ですので、この現象がどれだけ会話において一般的であるかを確認する必要があります。ポスター発表会場で収録されたポスター説明者の会話を対象に定量的にこの視線配布タイミングと発話とジェスチャーの関係を観察しました。ここでは結果は割愛しますが、上述した質的観察とほぼ同じ現象が定量分析でも観察されました。

2-6 . おわりに

以上のような分析から、以下のように表現主体が所持する視点の関係を図示することができます。



言語学やMcNeillのジェスチャー研究では、表現主体が対象や対象世界をどのように認知

し、その認知が言語形式やジェスチャーの形状をどのように規定するかに焦点が定められた研究がなされてきました。今回の発表では、これまでの視点概念に対して、メタ的な視点概念の提案を試みました。私は、叙事的視点は、表現主体が認知した、対象や対象世界を言語・非言語情報として表現することに志向しており、相互行為的視点は、表現主体の心内でプランした表現を聞き手に伝達すること志向していると考えています。

これまでのジェスチャー研究では、ジェスチャーの種類によって、明確な指示内容を担ったものか、それとも対人的機能を担ったものかという判断がなされる傾向にありました(Ekman & Friesen, 1969)。また、発話との同期関係からジェスチャーが指示する内容を判定し、発話との同期関係が見られないものを相互行為的であると指摘する研究もあります(Bavelas et al., 1992, Bavelas et al., 2002)。私は、このようにジェスチャーを異なる機能によって二つの範疇に分離する考えとは異なり、ジェスチャー表現内部に表現主体によって叙事的視点を所持して表現された箇所と相互行為的視点を所持して表現された箇所があることを指摘しました。このような考え方は、ジェスチャー研究ではこれまで検討されてきませんでした。日本語の文構造研究では自然に想定されています。益岡(1991)、仁田(1991)によれば、日本語のモダリティ表現の分析では、文構造内部に、表現主体が対象に志向した箇所(命題)と他者に志向した箇所(モダリティ)が存在すると考えられます。ジェスチャーについても同様にひとつのジェスチャー構造内部に表現対象志向と聞き手志向の箇所とが存在すると捉えることができるのではないのでしょうか。

表現対象から聞き手に向くといった表現主体の視線配布先の変化からは、同時に生起する言語表現やジェスチャー表現等の表現媒体の構造

や機能を明らかにするために有益な情報を得ることができます。今後も引き続き、視線の振る舞いを手がかりにして相互行為上での情報伝達の機能的な側面を明らかにしていきたいと考えています。

木村：坊農先生、有難うございました。行為者・観察者の視点を含む「叙事的視点」に加えて、会話参加者の共通視点としての「相互行為的視点」を提案し、その視点の推移プロセスを紹介して下さった坊農先生のお話から、非言語行動の話し手志向・聞き手志向という典型的なモデルから一歩進んだ、複数の視点を連続的な次元上に布置できるようなモデルを連想いたしました。それでは、細馬先生よろしく申し上げます。

3．身体を示しあう会話：自分の身体で相手の身体を語ること

細馬宏通（滋賀県立大学）

3-1．はじめに

今日は、対面している二人の人がお互いにお互いの体を示し合うという現象を通して、「聞き手」と呼ばれる人が実際には何をしているのかを考えたいと思います。

まず、「聞き手」ということばじたいがいささか曖昧な術語なんです。ここでは日常的に使われる「話し手/聞き手」という考え方を越えることが目的なので、便宜的にゆるやかな意味で使おうと思います。

たとえば、一人がもう一人に対して何かを教えているような会話場面、つまり知識状態が非対称な二人の会話場面では、いっぽうがある知識について「話し」もういっぽうが「聞く」という風にわたしたちはよく想定します。そこで、とりあえずは、こういう話し手、聞き手という

イメージをひっくり返したい。話し手が話題を持っていて、知識は話し手から聞き手に与えられ、そして、話し手によって知識が形成されていくんだ、という常識をひっくり返そう、というのがこの発表のねらいです。

ごく具体的にこういう場面を考えてみましょう。喫茶店で何かを食べていたら相手のほっぺたにミートソースが付いているとする。一番分かり易いのは、「ミートソース付いてるよ」と言って相手のほっぺたを触ることです。しかし、わたくしたちは直接相手を触らずに、自分のほっぺたを触って、ここについてるよ、と指しますね。そうすると、相手も自分のほっぺたを、ああ、と触って解決する。この過程では、ミートソースのついてる場所はいっぽうからしか見えないわけですから、まさに知識状態が非対称な会話場面だということになります。

ところが、この作業、簡単なようで意外と難しいのです。いちばんめんどなのは左右の表現です。向かい合っている人に「右に付いてるよ」と言われたとき、それは言っている相手から見た右なのか、自分の右から見た右なのかちょっとわかりにくい。つまり、視点があいまいになります。

これにジェスチャーが加わると、もっと複雑になります。たとえば向かい合ってる人が「右に付いているよ」といいながら右手をあげるとしますと、ことばとしては「右」と言ってるけども、こちらから見たら相手のあげているのは左側なんです。

つまり、どのような視点でどういう座標軸をとった上でことばやジェスチャーを発しているのかを理解しなければ、私たちは空間表現をうまく伝えあうことができない。ところが、日本語では左右を言い当てようとするときにそれが曖昧になるんですね。

もちろん、曖昧性を排除する表現もあるにはあります。「そちらから見て左」「こちらから見て右」というふうに視点を明言する方法ですね。

しかし、ここには「メンタル・ローテーション」というめんどろな問題が入り込んできます。向かい合った相手の体軸は、こちらと180度ずれています。

だから、もし相手の身になって左右を考えようとすると、自分の身体軸を180度回転させないといけない。対面した相手に対して「そちらから見て右」というためには話し手はメンタル・ローテーションを行わなければならないし、話者が「こちらから見て左」といったら今度は聞き手のほうがメンタル・ローテーションを行なって考えなければならない。いずれにしても、参加者のどちらかにメンタル・ローテーションの負荷がかかるわけです。通常、心理学ではメンタル・ローテーションを個人の認知の問題として扱っていますが、じつはこうした日常のコミュニケーションの中でメンタル・ローテーションは問題になるわけです。

相手の身体の一部を指し示す、というごく日常的な場面に、じつは曖昧性や心理的負荷がひそんでいる。では、じっさいにわたくしたちはどうやってこうした問題を解決しているのか。たとえば教える側（話し手）が何か特別な方法を取って、聞き手をうまく誘導しているのか。それとも何か別のやり方があるのか。これが今回お話しする観察で考えたいことです。

3-2. 実験手続き

さて、喫茶店でミートソースがほっぺたにつくのを待ち続けるのはたいへんなので、これを実験状況で再現してやることにしました。具体的には、対面した二人の片方にヘルメットをつけてもらいます。ヘルメットには直径7ミリの小さなシールが貼られており、その位置は中心

から上下左右にいくらかずれています。かぶった人はヘルメットのどこにシールがあるのかをあらかじめ知らないし、見ることもできません。このヘルメットをかぶった側を以後、「作業者」(X)と呼ぶことにします。

対面したもう一人の人は作業者Xのヘルメットについてのシールを見ながら、その位置を教える役割です。こちらの人を「指示者」(Y)と以後呼びます。Yは発語と身振りによって、Xのヘルメットについてのシールの位置を教えます。作業者は、指示者の発語やジェスチャーを手がかりに、人差し指一本でヘルメットを触りながらその位置を探ります。人差し指に限定するのは、掌で触られると、シールの感触がすぐにわかってしまうからです。

また、指示者が作業者のヘルメットを直接指さすと、これまたすぐに位置がわかってしまうので、この方法は禁じておきます。

作業者の人差し指がシールを探りあてたら、手をあげてもらい、課題は終了です。

3-3. 作業者の動きを指示者が追認する例

さて、このような状況で、指示者はどんな指示を与えるのでしょうか。ちょっと実例をお見せします。

【会話例1：「こっち?」「あ」「こっち?」】

作業者Xと指示者Yの課題遂行例。条件1（対面/シールはXから見て右）

（下線部はジェスチャーの起こった箇所を表わす）

Y01: うちからみて（Y:両手を膝のうえで叩く）

Y02: っとー

Y03: ひだりめ（Y:左手が膝から離れ、人差し指で左方向を指す）

X04: ひいー、うちからみ[て、ちょう]

Y05: [あ、Xちゃん]のひだりめ
（Y:左手をやや左方向に移動）

X06: こっち?（X:左手あがる）

Y07: あ（Y:膝の上の右手人差し指がのびる、X:左手が止まる）

X08: こっち?（X:左手をさげながら右手あげる
Y:右手があがる）

Y09: うん、そ（Y:右手人差し指をおさめながら右手さがる、左手さがる）

まず、やはり左右表現はむずかしいんだなということがよくわかります。指示者Yは3行目で「ひだりめ」というんですが、じっさいには作業者Xの右目の上にシールがついているわけです。「ひだりがわ」という表現ならともかく「ひだりめ」と言われたら、わたしたちはふつう、自分の左目を指しますね。つまり、「左目」「左手」「左足」というふうには、「左右」と自分の身体部位がくっついた表現をされると、わたしたちはそれを、自分の身体軸中心で考えやすくなるわけです。じっさい、作業者Xは5行目で、自分の左手をあげている。

さて、ここからが問題です。

この状況で、シールの位置を知っているのは指示者Yであり、作業者Xは知らない側です。ですから常識的に考えるなら、これ以後の問題解決は指示者Yが主導権を握って行なうのではないかと予想されます。しかし、じっさいはそうではない。

指示者はただ「あ」というだけなんです（7行目）。すると、作業者Xが自発的に「こっち?」と逆の手をあげます。指示者Yは「うん、そ」とそれを追認するだけです。

つまり、左右の訂正をしなければならないときに、必ずしも指示者がすべてを指示しているわけではないのです。むしろ作業者が自発的にオルタナティブな提案をし、その提案を使って指示者が次の指示を与える、ということが起きているわけです。

3-4. 相手に見えないジェスチャーを行なう例

同じことをモニタ越しにやってもらった例もお見せします。この例では、作業員Xから指示者Yが見えないように、Yには衝立の反対側に移動してもらいます。作業員Xの正面から胸から上をビデオカメラで撮影して、衝立の反対側にあるモニタに流します。指示者Yはこのモニタを見ながらXの様子を観察し、ヘルメットのどこにシールがあるかを衝立越しに口頭で指示します。XとYは互いに声を交わすことができるので、XはYの声のみをたよりに人差し指でシールの位置を探ります。

すると、おもしろい現象が観察できます。まず、いくつかのペアで、指示者Yがジェスチャーをしているのが観察されました。この条件では、指示者のからだの動きは相手に見えないし、そのことを指示者本人もわかっているのですが、それでも体が動いてしまう。つまり、この動きは、相手を指示するためというよりは、指示者自身の考えを促進するために役立っているのではないかと考えられます。

3-5. とにかく作業員に動いてもらう

さて、再び対面状況の場合に戻ります。先の例では、指示者のことばの中に左右表現が表われていましたが、左右表現を使わないペアもいくつかはあります。ちょっと見て頂きましょう。

【会話例2：「まゆげのうえ」】

作業員XとYの課題遂行例。条件2（モニタ越し/シールはXから見て右）

Y01: えと

Y02: まゆげのhhh

X03: hhhhまゆげのうえ? (X:右手を上げ目の下に)

Y04: うん (X:右手を目の下で右側に移動)

(X:右手を目の下から上に移動)

Y05: うん (X:右手人差し指をヘルメットに接触)

X06: こっち?

Y06: そっち (X:右手をさらに上へ)

衝撃的なのは「まゆげ」という表現ですね。「まゆげ」は、左右両側についており、ヘルメットの下にあるわけですから、2行目のYの発話にはなんら有用な情報は含まれていない。にもかかわらずXは右手を挙げ、Yがそれを「うん」という発話で承認する(4行目)ことによって、結果的にXの人差し指はシールに近づいていくのです。つまり、YはXによって自発的に示された右手を利用して、この課題を達成しつつあるわけです。

作業員Xが動くことじたいが指示者Yの指示を助ける。次の例はこのことをより戦略的に用いています。

【会話例3：「とりあえず、上げ」】

作業員XとYの課題遂行例。条件1（対面/シールはXから見て左）

(X:両手の人差し指を出して上下する)

Y01: とりあえず、あげ

(X:両手を上げかけて、右手のみを上げてヘルメットに接触)

X02: そ、これで、もうちょっとこっち (Y:右腕を前に出し大きく右にはらう)

この例でも「とりあえず、あげ」という指示者Yの発話には、左右の情報はまったく含まれていません。さらにいえば、作業員Xのあげた手は、シールとは反対側です。ところがYは、「そ、これで」とXの行為を承認し、そのままXの右手を左側に移動させるようなジェスチャーを行なっているのです。

今回の実験では、他にも、作業員Xが、Yの指示内容には含まれない行為を行ない、Yがあとからそれを承認する場面が頻繁に観察されました。身体の示しあいには曖昧さがつきまとうのですが、こうした曖昧さは、Xの示す行為を

Yが訂正することで、じつは簡単に解決するのです。

つまり、「知っている側」が「知らない側」に情報を一方的に提供する、という一方通行的なコミュニケーション観では、こうした現象は説明できない。身体動作に注目すると、むしろ、従来は受け身だと思われていた側が、自発的にさまざまな行為を行なっている。その自発的な行動は相手の情報表現を超えるんですけども、その超えた表現が話し手の次の行動へのリソースになるんですね。ですから、たとえ二者の持っている情報が非対称であってもゴールというのは相互行為的に達成されるわけです。曖昧性というの、いっぽうの側による完全な発話、ジェスチャーによって明確に指示されていくんじゃなく、むしろ相互行為によって絞り込まれていく。しかも、相互行為的に絞り込むと、すごく速い。多くの例に、指示や作業の間違いが見られるにもかかわらず、作業の達成はすごく速いのです。

駆け足で、いくつかの例をお見せしました。ごく限られた状況での現象ですが、いずれの例でも、「話し手から聞き手に情報が伝わる」という考え方とは異なるコミュニケーションが観察できたのではないかと思います。

木村：有難うございました。異なる視点や情報をもつ2人が、言葉でうまく表現できない情報について、身振りを補完的に用いて表現し、最終的なゴールにたどり着くという細馬先生のお話は、相互依存的な関係にある2人をつなぐ架け橋として身振りが位置づけられており、興味深かったです。

では、続きまして指定討論の先生方からコメントをお願いします。

4. 指定討論

西尾：大阪学院短期大学の西尾です。まず、細

馬先生のご研究ですが、話し手と聞き手が2者間のループの中でお互いの発話と身振りとを手がかりにしながら、最終的に目標にたどり着く過程がよく示されていて非常に面白い研究だと思いました。その中で気になった点は、実験のビデオにもありましたが、指示者が「右」、「左」という相対参照枠としての言語を用いずに、発話なしで身振りだけで方向を指示する場合や、あるいは「こっち」や「こっち側」というような方向の指示代名詞の発話と身振りを組み合わせて指示する場合の事例です。

すなわち、あえて「右」「左」という相対参照枠ではなく、身振りのみあるいは身振りが方向を示すことを補助的に示す指示代名詞との組み合わせを使うことで、指示者(X)、行為者(Y)にとって共通の参照枠、すなわち二者間でその場で作られた絶対参照枠が使われていたのではないかと考えられるわけです。だからこそ、「右左」で指示するよりも速く目標にたどり着けたのではないかと思いました。言い換えればそれは2者の身体を中心軸として、言語化すると「こっち側」と「(別の)こっち側」と言うしかない、2者間にとっての絶対参照枠が利用されていたのではないかと考えられるわけです。2者が向かい合うとき、その2つの身体を軸とする参照枠がその場で出現し、それに依拠してコミュニケーションが成立していたとするなら、コミュニケーションにおける身体の道具的利用の仕方の一つとして、非常に興味深いと思いました。

もう1点は、実験が対面-非対面の比較で行われていましたが、対面、非対面で伝達効率あるいは課題遂行時間等に何か違いがありましたら伺いたいと思います。

次に坊農先生のお話ですが、伝達内容を叙述するという視点の上に、聞き手に対する配慮としての相互行為的視点が付加されて、2者間でコミュニケーションが進んでいくというお話

で、興味深く拝見しました。特に、発話者が自身の視線移動を契機として次の身振りが開始され、さらにその発話途中で聞き手への視線の移動がつぎの聞き手の行為(うなずき)の契機として機能することがデータとしてよく現れていて非常に面白かったです。McNeillがいうところの“観察者”の視点と“行為者”の視点をまとめて叙述的視点とし、これとは別のものとして相互行為的視点を提案されているわけですが、お尋ねしたい点は、やはり「視点」という用語の内容です。「視点」が機能なのか、意図なのか、注意なのか、また叙述と相互行為は異なる視点なのか、という点です。といいますのは、叙述する、表現するという行為自体がすでに他者の存在を想定しているわけですから、叙述的視点には相互行為的視点が多少なりとも含まれていると考えることも可能でしょう。このように考えると、坊農先生のお話では異なる2つの視点を発話者が同時に持つ、という印象を受けたのですが、私の感想としては、“叙述すること”から“聞き手に対する配慮”へと注意の方向あるいはその分配の割合の変化という形で捉えた方がよいのではないかと思います。

磯先生のお話についてですが、第一に、フロアからの質問にもありましたが、「不均衡」についてもう一度確認させていただきたいと思います。視線やうなずきが不均衡になるという点で、話し手A、Bそれぞれの発話者の量の均衡さが聞き手Cの均衡さの意味も当然違ってくるわけです。A、Bの発話者は均衡に発話していたのか不均衡だったのか、またA、Bの発話が不均衡であった場合のCの視線の不均衡がどのように定義されているのかについてご説明お願いします。

第二に、今回の3者間のコミュニケーション場面と2者間の場面と比較した際の相違点がもしあればお話していただくと面白いと思います。

第三に、これは単に思いつきなのですが、Cのコミュニケーション場面で目標が自己志向的目標(コミュニケーションに自分が満足する)と他者志向的目標(相手によい印象を与える)と言われていましたが、それらの目標は最初から与えられていたわけではありませんでした。実験で明示された目標は「について話し合う」という形で別にあったわけです。もしその目標が「満足するような会話コミュニケーション場面を作ってください」とか、「自分の印象が良く見えるようなコミュニケーション場面を作ってください」という形で参加者に意識化された場合、今回と同様の結果が出るのか、また、その目標は達成されるのかという観点から検討するのも興味深いのではないかと思います。

ありがとうございました。以上です。

安藤：京都大学大学院教育学研究科の安藤と申します。私は非言語行動を専門にしているわけではなく、演劇俳優を対象に研究をしています。荒川さんから今回のお話をいただいたときに、「安藤さんのご研究に引き付けての指定討論をしていただければ嬉しいです」というコメントをいただきましたので、お言葉に甘えまして私の興味からお話をさせていただきたいと思います。もしかしたら的外れなことや、答えにくいことも申し上げるかもしれませんがご了承ください。

磯先生のご研究ですが、3者間会話と聞いたときに、舞台上で俳優同士が会話をしているのを客席の観客が聞くというのも、一種の3者間会話ではないかということをもまず思いつきました。観客というのは話し手にはなりえず、常に聞き手であるという点で磯先生のご研究とは異なりますが、これも3者間会話の一つの形ではあるかと思います。今回のご発表では、行動配分が均等であったり非均等であったりしたときに、相手にどのように思われるかということが

焦点の1つでしたが、私としては、なぜ聞き手の行動配分が均等になったり非均等になったりするののかということに興味を持ちました。会話をする2人の会話量が非均等ならそれに合わせて行動配分が非均等になるのも理解できますが、例えば会話量が非均等なのに行動配分が均等であったり、会話量が均等なのに行動配分が非均等になるということが演劇でもままあります。話していない人の方が気になるということがあると思うのです。どうしてそのようなアンバランスな行動配分になるのかということに興味を持ちましたので、実験される中で感じたことであるとか、何かお考えがありましたらお聞かせいただけたらと思います。

次に坊農先生のご研究ですが、プレゼンなどをする人と俳優というのは非常に似た面があると以前から考えていたので、とても興味深く聞かせていただきました。今回のご発表では、登場人物の視点と観察者の視点に、相互行為的視点を加えられたということでしたが、演劇でも非常に似たことが言われていると感じました。演劇俳優は登場人物という自分と違う人間のように振舞うので、登場人物の視点に立っているとよく考えられるのですが、それだけではなく、よい俳優は、自分の振る舞いが観客にどのように見えているのか、自分がそう振舞うことで観客がどのように感じるのか、を考えると観客の視点も常に持ちながら演技をしていると言われています。ただ、演劇では役の視点と観客の視点を常に同時に持ちながら演技していると言っていますが、坊農先生のご研究の場合は、途中で重なるけども常に両方持っているわけではないという点が、少し異なると思いました。これはどういうことなのかと私なりに考えたのですが、プレゼンをする人も、ポスターの方を見ながらも、例えば自分の体でポスターを隠してはいけないとか、観客のことは考えていると思うので、そういった点では観客の視

点に立っている、演劇と同じであると言えるのではないかと思いました。ただ、坊農先生は、「観客の方を気遣っている表出をする」という意味で、「視点に立つ」という言葉を使っているのかと感じました。つまり、プレゼンをする人も俳優も、心的には似たことをしているのですが、視点という言葉の使い方が違うだけなのかという感じを受けましたので、そのあたりのお考えをお聞かせいただけたらと思います。

最後に細馬先生のご研究ですが、聞き手の体について自分の体を使って話す際に参照枠が曖昧になってしまったとき、聞き手がすぐに行動することで、「ズレがあるな」ということが分かってすぐに訂正ができ、相互作用的に柔軟に解決していくというプロセスが非常に面白いと思いました。演劇に置き換えた時にすぐに思いついたのが、演出家が俳優に指示を与えるときも同じ様なことが言われているということです。自分の解釈を何も持ってこずに、自分からは何もしない俳優は扱いにくい、逆に、間違ってもいいから自分なりの解釈を演技で大きく表現してくれると、「あそこが違う」とか「もっとこうしろ」と指示が与えやすいと言われることがあります。やはり、演出家が持っている正解のイメージというか、目指すイメージを、他人の体を使って表現するときに、表現する人の体の側から何かを与えてもらった方が、早く正解に近づけるということがあるのかなと感じました。今、演劇でも同じ様なことが言えるのではないかと申しましたが、今回の結果はどの程度さまざまな場に通用的のかについて、お考えをお聞かせいただけたらと思います。今回のような相互作用的な解決の仕方が、どのくらいどういった場で通用して、どういった場では通用しないのか、何かお考えをお聞かせいただければと思います。

古山：情報学研究所の古山と申します。よろしくお願いたします。まず最初に、荒川さんがイントロダクションでMcNeill先生の仕事に触れられ、ジェスチャー研究が聞き手志向から話し手志向に変わったとお話されました。その発見は非常に大きかったけども、その両者の二項対立的な図式が出てきてしまい、それには限界があって、それを超えるということで今回はワークショップを企画されたということでした。非常に興味深いワークショップを企画されたと思います。実は私はMcNeill先生の弟子なんですけども、92年にMcNeill先生が日本心理学会にいらっしやいまして、多分92年だと思うんですけども、講演されたときに、私は先生の滞在中一週間ずっと先生をご案内して、荒川さんと同じ様な問題意識を先生にぶつけてみたんです。聞き手志向が重要なんじゃないかとか、それを超えることが重要なんじゃないかというような話をしたら、McNeill先生は興味をお持ちになりました、それで先生のところへ留学をするということになってしまったのです。で、懐かしいなと思いながら荒川さんのお話をお聞きしていたんですが、日本でも、こうした問題意識が育ってきているというのは非常に嬉しいことだと思いました。そして、今日発表されたどの研究も大変興味深くって、勉強させられることばかりなんですけども、時間がそんなにありませんので1つずつ質問をさせて頂きたいと思えます。

まず、磯さんのご研究の、状況によっていろいろ変ってなかなか法則性をみつけにくいというお話なんですけども、印象評定というのは非常に僕は興味深い方向だと思うのです。それと合わせて、会話の内容と視線の配分がどのように、これはコメントになるんですけども、推移していくのかというのをご覧になるとさらに面白いんじゃないかなと思います。特にですね、今回の問題設定は話者とか聞き手とかというこ

とだったので、話者問題とか発話量などに焦点を当てられていると思うのですが、例えば、討論条件なんかだと一つの統一した見解に至るといのが課題になってます。例えば、最初意見が食い違う場合に主導権を持っている人がいると思うんですね。それは必ずしも話者の話題と一致する形で推移してるとは限りませんので、そういう主導権の推移がどのように視線の配分と関わってくるのかを観てみるというのも面白い視点じゃないかなと思います。お話をお聞きして、以上のようなことを考えました。

それから、坊農さんのご発表、相互行為的視点に関する提案、非常に面白いと思います。そして、単にそういった視点があるというだけではなく、視点の二重性ということを指摘されて、これは非常に興味深いと思いました。一般に、視点にはキャラクタービューポイント、オブザーバービューポイントがありますが、McNeill先生が提案するようなこれらの視点がブレンドするような、例えば、あるキャラクタービューポイントでなにかを外に出す、放り出すことを示すんですが、それがその時点までに設定されたオブザーバービューポイントに沿うような形でなされる。例えば、実際にはあるキャラクターが自分の左側に放り出しているのに、オブザーバービューポイントの設定の内と外が、内が左側、外が右側のようにマッピングされていると、そのオブザーバビューポイントに沿うようなかたちで、右方向へ放り投げるジェスチャーをする場合がある。それはある種視点の、よく認知言語学ではブレンドと言われてますけども、そういったかたちで視点の「ブレンド」が起こるんです。で、そういうものが、相互行為的視点と叙述的視点の間でも起こるのかどうか、そのあたりをお聞きしたいと思います。そして、もし起こるとしたらどのようなときに起こるのかということも、もしご存知だったら教えていただきたい。それからですね、坊農さん

にはもう一つあるんですけども、視線とポイントングジェスチャー、視線と指差しが一緒に動いていったというお話だったと思うんですけども、例えばですね、どのくらい話者が指し示すものについて知っているかによってタイミングが多少ずれることがあると思います。例えば、ホテルマンにお手洗いどこですかって聞いたら、「あちらでございます」と、指差しの方が先行しちゃうということはよくあると思うんです。そういったことがデータで見られるかどうか、もし見られないとしたら何故見られないのかということをお聞きしたいと思います。それから、そういったタイミングのズレが発話終了など、ジェスチャー終了のときに相手の人を見るタイミングにもなにかそういったプレミたいなものがあるのだろうか。ま、ちょっと興味を持ちましたのでお話頂ければ幸いです。

最後に、細馬さんのご研究ですが、細馬さんとは数年間いろんな機会にご一緒させていただいてですね、もう面白いということしかほとんどないんですけども、それではコメントにならないので、何か質問しなきゃというふうに思います。で、これは西尾さんのご質問とも重なってくるんですが、なぜ情報の提供が不十分でもあるにもかかわらず上手くいっちゃうのかというのは実は非常に難しい問題だと思うんですね。これは知覚情報、あるいは場を共有しているということの威力というのが多分すごく大きいんじゃないかと思うんですけども、これに関して考え始めると知覚論をね、パーセプションとしての基礎というのを恐らく考え直さなくてはいけないということまでいくと思うんです。その辺り何かお考えがありましたら教えて下さい。ご研究の背景になっているというか前提とされてるようなところだと思うんですけども、その辺りをお聞きしたいと思います。それから、もう一点あるんですけども、複雑なことを説明する時、実際こう話者がですね回転して、とい

うことはよく起こると思うんですけども、今回はそういうことをしないというのが教示ですか？

細馬：話者自身がこう体を動かして

古山：ええ。

細馬：あ、許されています。

古山：許されている。でもなかった？

細馬：ありました。

古山：ありました？その辺りちょっと。どういことがね、きっかけでそういう結果が起こるのかというのが、是非聞いてみたいなと思います。

木村：最後に企画の高橋先生からもコメントをお願いします。

高橋：まず、指定討論の先生方のお話しと重複あるいは関連するとは思いますが、私からも話題提供の先生方にコメント・質問をさせていただきます。

磯先生のご発表に対して質問ですが、16組（あるいは各条件での8組）の参加者の会話内容自体の結果についてもご説明をいただきたいかと思います。

たとえば討論条件であれば、3人の参加者の間で、対立から合意へと至ったのか？最初から合意だったのか？など会話内容が異なることが予想されますが、このような会話内容とは独立に、以降の結果をまとめてしまっただ大丈夫かなと疑問が残ります。

次に、坊農先生および磯先生が取り上げられている「視線」について、お二人にコメントです。元のデータは、参加者を外から映した映像としますので、視線の内容をどの程度まで厳密に記述できているのか疑問です。たとえば、ジェスチャー空間の中のどこに視線を向けているか、まで記述しなくても良いのでしょうか？一方理論的なことに関連もしますが、参加者の課題遂行には、顔の向きや表情、身体の向

き、2(3)者間の距離などとそれらの変化といったことも伴うと思われますが、あえて視線に注目する必然性は何でしょうか？

細馬先生のヘルメット実験はたいへん興味深いものでしたが、参加者のジェスチャーや発話はこの課題に特有なものではないかとも思いました。参加者の属性が不明ですが、ヘルメットを被ってこのような課題に取り組むのは初めての経験だったと思います。しかし、研究者が思っているほど複雑な課題だったという訳ではなく、結果で示されたようにして、何となくできてしまう、くらいの課題だったと思います。たとえば、ジェスチャーをすることを禁止するなどの制約を付加した課題での結果と比べてみると、今回の結果をよりよく解釈できるのではと思いました。以上、コメントです。

最後にまとめた感想です、抽象的になりますが、結局この手の研究全てに当てはまるように思っていますが、参加者に求める課題の内容と、その課題を遂行する際に使われた(あるいは使われるであろう)発話やジェスチャーの機能と(視線や身体の向きなど)その他の機能とを、どれくらい独立したものとして結果として示すことができるのか?と言ったあたりが、難しいけれどもおもしろいところかなと思いました。以上です。

5. 話題提供者の回答

磯: ご意見ありがとうございます。まず、西尾先生の不均衡に関するご質問ですが、うなずき配分については既に述べましたように、表出量の個人差と話し手の発話量の個人差を統制しています。したがって、2つのペア間(話し手Aと聞き手C、話し手Bと聞き手C)の発話の不均衡ではなく、うなずきの不均衡であると考えられます。一方、視線配分については、(相手が発話中の視線量) / (全体の視線量)を掛け

て視線量の個人差を統制していますが、相手の発話量は統制していません。分析の都合で今回の形を取りましたが、発話量の不均衡の影響を検討できていませんので、今後明確にしたいと思います。次に、2者間会話との相違ですが、行動配分と視線モニタリングは3者特有の指標のため残念ながら比較はできません。逆に3者以上の多人数会話との比較に有効だと思われます。ただし、単純な表出量は2者との比較が可能であり、討論場面よりも雑談場面のほうが視線量が多く、その機能は情報収集、すなわちモニタリングであるとされています(川浦, 1990)。本研究においても視線モニタリング行動は親密条件で多く表出され、2者間と類似した結果でした。さらに会話行動評価と関連していましたので3者間では好意的に働くものと思われます。最後に、目標を敢えて与える実験デザインは非常に面白い視点だと思いますので、是非やってみたいです。

次に、安藤先生がご指摘の、均等な会話に対する非均等な行動配分というようなアンバランスな現象の不思議さについて、私見になりますが述べさせていただきたいと思います。特定の目標がない親密条件では、次に誰が話すのかをチラチラと確認することが多くなり、必ずしも相手の発話量に左右されて視線が動くわけではないようです。一方、結論を求められる討論条件では、順番に各自の意見を述べるのが暗黙のルールになっているようで、相手の発話量に左右されて視線が移動していたように思います。その意味で、古山先生がおっしゃっていた会話と視線の推移の対応、さらに主導権と配分との関係についてみていく必要があるかと思えます。有益なご指摘ありがとうございます。

最後に、高橋先生ご指摘の会話構造との関係については、おっしゃるとおりだと思います。藤本らが本データの発話内容から発話者の役割と印象との関連性を検討していますので、今後

対応させてご報告したいと思います。しかし、先生のおっしゃった全体的な構造の推移については未検討領域ですので、合わせて今後の課題としたいと思います。ありがとうございます。

坊農：コメント頂き、ありがとうございます。先生方のご質問は、「視点概念について」に集約されているように感じました。ですので、ここでは、3人の先生方のコメントに一つ一つお答えするよりも、視点概念について更に詳しくご説明させていただきたいと思います。

西尾先生には、「叙述すること」から“聞き手に対する配慮”への注意の方向あるいはその分配の割合の変化という形で捉えたほうがよいのではないかとご意見いただきました。また、安藤先生には、「役の視点と観客の視点を常に両方持ちながら演技していると言われている」という演劇研究の知見から、私自身が挙げる視点概念との相違点を補足説明してほしいというご意見をいただきました。次に、古山先生には、「認知言語学で言われている「ブレンド」が、McNeillが提案するキャラクタービューポイント(登場人物の視点)、オブザーバービューポイント(観察者の視点)にも見られる現象である」というジェスチャー研究の知見から、私自身が挙げる視点概念にも同様の現象が起きる可能性があるかというご質問を受けました。これらのご質問は、私が提案する視点概念がまだ考えが完全にまとまっていないことに起因していると思います。はっきりした説明が欠けてしまい、申し訳ありません。まだまだ考え切れないことが多いのですが、今分かる範囲でできる限りお返事したいと思います。

皆さんにご指摘いただいたように、表現主体が所持する視点は、その時々でどちらが所持されているかをはっきり断定できるようなものではありません。西尾先生がおっしゃるように、その時々で二つの視点の分配の割合が変化する

という考え方は、私たちの日常生活における感覚に非常に近く、正しいと思います。私はこの視点の二重性を考え始めたとき、二つの視点と同時に所持されるのが基本形態であると思っていました。この考えは安藤先生が挙げられた演劇研究、古山先生が挙げられたジェスチャー研究と近いと思います。しかし、その後私が徐々に疑問を持ち始めたのは、どちらかの視点だけしか持たないということはないかということでした。今回の西尾先生のご指摘を参考にさせていただき、言いかえれば、どちらかの視点が強められる場合はないかということです。我々は会話といった相互行為の中で情報を伝達しますが、会話全体がまんべんなく相互行為的であるというのは違うと思います。話し手が情報を所持し、それを伝達する際には、話し手はより一方向的に物事を述べ立て、叙述的な会話場面であると思います。また反対に、会話においてどちらが絶対的な話し手であると決められておらず、共同に話を進めていくときは、会話参加者は互いに係わり合い、相互行為的な会話場面であると思います。このような違いが、参加者間で視覚チャンネルが開かれているか否かという会話における表面的特徴から判断できないかと考えました。高橋先生がご指摘されたように、私の今回の分析では、話し手の視線に焦点を当てていますが、話し手と聞き手の距離感、顔の向き、身体の向き、表情にも何らかの変化が現われるかもしれません。なぜ、あえてここで話し手の視線に着目したかと言いますと、視覚チャンネルが開かれている会話環境、閉じられている会話環境上での情報伝達の相違点を観察したかったという研究目的を始めに持っていたからです。今後は一旦考え方を改め、距離、顔と身体の向き、表情といった表現モダリティにも注目していくべきだと思います。

話し手が聞き手を見ていないという表面的な振る舞いをしたとしても、聞き手を前に発話し

ているという時点で相互行為であることは間違いありません。しかし、話し手が聞き手と共同な会話進行を求めているか、非共同な会話進行を求めているかという違いはあるのではないかと現時点では思っています。

細馬：まず西尾先生のコメントから。二者間でその場で作られた絶対参照枠が使われていたのではないかと、というご指摘、おもしろいポイントだと思います。Levinsonが言語学的にやった分類では、人間の使う空間表現の枠組み（参照枠）は、あくまで個人の問題として扱われていて、「絶対参照枠」というときも、東西南北のような、一人の人間と環境との関係でしか考えられていない。けれども、じつはコミュニケーションでは、二人の人間のあいだでいわば共有環境が設定されて、その共有環境のための絶対参照枠ができあがるのかもしれない。そう考えると、それぞれが自分の身体を中心に体を動かしているのにコミュニケーションできている理由がよりはっきりするかもしれませんね。

対面、非対面ではあまり所要時間に差がありませんでした。これも今後検討したい問題です。

安藤先生のご指摘、おもしろい応用場面ですね。わたしの実験結果では、弱い差ではありますが、聞き手（作業者）が相手のことばやジェスチャーを解釈するときに、ジェスチャーの場合はより自分中心の参照枠でとらえやすいという結果が出ております。演出者が身体動作を使って指示したほうが、舞台での動きを伝えるときはより簡単かもしれない、という予測が立ちそうです。

古山先生のご指摘、まず、話者が上半身をひねって相手の左右を考えるという現象ですが、これは今回の実験でも他の実験でも観察されました。たとえ相手に見えなくてもこれは起こりますんで、単にコミュニケーションのためのも

のというより、思考を促進するためのジェスチャーがコミュニケーションの場に漏れている現象、と考えたほうがいいかもしれません。

場の共有の問題はわたしもすごく重要だと考えています。向かい合っている、相手の身体が見えている、という、すごく当たり前のことが、じつはじつはそこで行なわれるコミュニケーションの質に大きな手がかりを与えている。さらに、参加者がお互いに、そうした場を自分たちが共有していることを前提にことばや身体動作を発している。では具体的にどういう場の情報をどういう形でことばや身体動作に利用しているのか、というのをいろんな状況で今後調べていく必要があると思います。

6. まとめ

荒川：興味深いご発表ありがとうございました。これまでの自己指向性・聞き手指向性といった枠組みだけでは非言語行動は説明できず、「非言語行動を誘発する契機としての聞き手」という側面が明らかになったように思います。ご参加いただいた皆様、どうもありがとうございました。

引用文献

- 荒川歩・鈴木直人 2004 しぐさと感情の関係の探索的研究 感情心理学研究,10, 56-64
- Bavelas, J., Chovil, N., Lawrie, D A. & Wade, A. 1992 Interactive Gestures. *Discourse Processes*, 15, 469-489.
- Bavelas, J., Kenwood, C., Johnson, T. & Phillips, B. 2002. An experimental study of when and how speakers use gestures to communicate. *Gesture*, 2, 1-17.
- Bem, D.J. 1972 Self-perception theory. In L. Berkowitz (ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, 4, 1-62.
- 大坊郁夫 1978 3者間コミュニケーションにおけ

- る対人印象と言語活動性 実験社会心理学研究, **18**, 21-34.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. 1969 The Repertoire of Nonverbal Behavior: Categories, Origins, Usage, and Coding. *Semiotica*, **1**, 49-98.
- Hall, E. T. 1976 *Beyond Culture*. N.Y.: Anchor Press
- 川浦康至 1990 コミュニケーション・メディアの効果 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一(編) 社会心理学パースペクティブ2 : 人と人を結ぶとき 誠信書房 Pp.67-85.
- Kendon, A. 1967 Some function of gaze direction in social interaction. *Acta Psychologica*, **26**, 22-63.
- Kendon, A. 1980. Gesticulation and speech: Two aspects of the process of utterance. In M.R. Key (ed.), *The relation between verbal and nonverbal communication*, pp. 207-227. The Hague: Mouton.
- 木村昌紀・余語真夫・大坊郁夫 2002 感情エピソードの会話場面における表出性ハロー効果の検討 日本感情心理学会第10回大会
- 益岡隆志 1991 モダリティの文法 くろしお出版
- McNeill, D. 1987 *Psycholinguistics : a new approach*. New York : Harper & Row.
- McNeill, D. 1992 *Hand and Mind. What gestures reveal about thought*. Chicago: University of Chicago Press.
- 仁田義雄. 1991. 日本語のモダリティと人称 ひつじ書房
- Özyürek, A. 2000 The influence of addressee location on spatial language and representational gestures of direction. In D . McNeill(Ed.) *Language and gesture*. N.Y.: Cambridge university press. Pp. 64-83.
- Iso, Y., Kimura, M., Sakuragi, A. & Daibo, I. 2004 The effects of nonverbal behaviors on impression formation and rapport in a triadic communication. 28th International Congress of Psychology (ICP2004) Beijing.

(2005. 2.15 受理)

